原著論文

絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響

栗川 直子

岡山大学大学院

The Influence of Understandability on the Combination Effect of Painting and Frame

Naoko KURIKAWA

*Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University,
3-1-1 Tsushimanaka, Okayama-shi, Okayama 700-8530, Japan*

Abstract : According to previous studies, highly understandable painting is generally associated with favorable evaluations. This study investigated the contribution of understandability to the combination effect of painting and frame. Using eight combinations, the degrees of harmony and impression (*evaluation, activity*) were rated. It was found that when a highly understandable painting was combined with a regular and symmetrical frame, the degree of harmony and *evaluation* were higher than if the painting was combined with an irregular and complex frame. In contrast, a poorly understandable painting harmonized with both types of frames and their *evaluation* only slightly differed. The results indicated that the aesthetic appreciation of art is affected by the frame and that a highly understandable painting is harmonized only in a regular and symmetrical frame that does not impinge on the prototypicality of the painting.

Keywords : *Frame, Painting, Understandability*

1. は じ め に

額縁と絵画の相性は、作品全体の印象を左右するといわれる。額縁をつけることで私たちの目は絵画の深い意味合いにまで導かれ、構図が引き締まって見えることに気づくのだという [1]。しかし、作品と額縁の組み合わせの法則は主に経験に基づくものであり、最適な組み合わせを数的に分析した研究は見当たらない。その理由の1つは、組み合わせを考える前段階として必要な、絵画のカテゴリー化が困難なためであると考えられる。美術史を紐解くと、ギリシャ・ローマ、ゴシック、ルネサンス、バロック、ロココと、その長い歴史の中で様々な表現様式が生み出されてきたのがわかる。さらに現代絵画においては、表現内容そのものではなく、いかに他とは異なる表現様式を発明するかが重要視されている [2]。このように無数の表現様式が存在する状況では、客観的な特徴によって絵画をカテゴリー化し、特定の額縁と相性の良いグループを見出すのは難しい。

しかし、心理学における絵画研究では、様々な表現様式に対する鑑賞者の主観的反応に共通性が見出されている。代表的なものが、具象画と抽象画に対する印象や選好の違いである。岡田・井上 [3] は、具象画と抽象画各5点についてSD法による印象測定を行ったところ、具象画では、美しい、好ましい、やわらかい、といった評価が高く、抽象画では、個性的、おもしろいといった評価が高かったことを報告している。また、筒井・近江 [4] も同様に、具象画と抽象画各3点について印象を測定したところ、具象画では快さ、

美しさ、好ましさの値が高く、抽象画では面白さ・楽しさの値が高かったという。

具象画と抽象画のどちらをより好ましく感じるかは、鑑賞者の芸術に関する専門的知識の有無によって異なると言われている。専門的知識を持たない者はそうでない者に比べて写実的な絵を好むこと [5] や、抽象化された画像・モノクロ画像よりもオリジナルの具象作品・カラー画像を好むこと [6] が報告されている。写実的・具象的な絵画は抽象的な作品と比べ典型性が高い。そのため、専門的知識がなくてもわかりやすく、好まれやすいと考えられている [7]。

なぜわかりやすい絵画が好まれるのかについて、Reber, Schwarz, & Winkielman は処理流暢性理論による説明を行っている [8]。彼らの理論によると、まとまりのよさ、シンメトリー、コントラスト、典型性といった刺激の特性や、反復接触、潜在学習、生育環境といった鑑賞者の接触経験によって、絵画や音楽などの美的対象の処理の容易性が高まる。こうして処理が流暢に行われると、それに伴って鑑賞者の反応がポジティブなものになるという。この理論に則して、処理流暢性の向上が絵画作品に対する好ましさを高めることが、いくつかの実験により示されている。例えばKuchinke, Trapp, Jacobs, & Lederの実験 [9] では、処理流暢性が高い(内容到達性が高い、つまり抽象性が低い)キュビズム絵画は、流暢性の低い絵画と比べて何が描かれているかを認識するのに必要な時間が短く、好ましさの評定値も高かった。また、ポジティブな感情反応を示す瞳孔の拡大もみられた。Belke, Leder, Strobach, & Carbon [10] は意味的プライミング手続きを用い、絵画の表現内容と意味的に関連した題名、

無関連の題名, “無題”という文字列を, 異なる抽象レベルの絵画に先行して呈示したところ, 関連した題名を先行呈示された場合に絵画の好ましき評価値が高く, 特に写実的絵画においてその傾向が顕著であった。また, 筒井・近江の研究[4]では, 具象画に対してモザイクフィルタをかけて具象性を低下させると理解度が低下し, それに伴って快さ, 好ましき, 美しさも低下した。一方, 抽象画はモザイクフィルタをかけても理解度に変化が見られず, 美的評価にも有意差はみられなかった。これらの知見より, 絵画に対する印象や選好は, 作品の典型性, すなわち理解のしやすさに影響を受けると考えられる。絵画に対する反応の違いは, 額縁との組み合わせにも影響を及ぼすだろう。そこで本研究では絵画表現に対する主観的な評価の指標として理解度を取り上げ, 絵画と額縁の組み合わせ効果に及ぼす理解度の影響について検討した。

額縁には形, 装飾, 色, 大きさなど様々な要素がある。中でも額縁の形は, 時代の趣向や絵画の表現内容の変化に伴って, 円形, 楕円形, 縦長の長方形あるいは横長の長方形など, さまざまな変貌を遂げてきており[11], 表現の一部として利用されてきたことが分かる。しかしながら, はじめに述べたとおり, 絵画と額縁の組み合わせによってもたらされる効果は経験的には知られているが, 形をはじめ, 額縁の要素の役割を数量的に分析した研究は見当たらない。また, 額縁の形は目につきやすい要素であり, たとえ芸術に対する知識が浅い鑑賞者であったとしても, 変化を把握するのが容易であると考えられる。以上の理由により, 本研究では, 額縁に含まれる様々な要素のうち形を取り上げることとした。

形と印象には一定の対応関係がみられることが, いくつかの先行研究から示されている。Oyama & Haga [12] は, 14個の線画についてSD法による印象測定を行い, 力量性, 評価性, 活動性という3つの因子を見出した。対象の持つ大きさや強さにかかわる因子である力量性は, 角張っていて鋭さや硬さのある図形と, 快さや好ましきにかかわる因子である評価性は, 対称性と規則性があるバランスの良い図形との間に対応がみられ, 動きや明るさにかかわる因子である活動性は, 評価性とは逆に規則性があるバランスの良い図形には当てはまりにくく, 複雑性を備えた図形と結びつきやすいことが報告されている。Kikuchi [13] は, 25個のランダム図形を用い, それらを一対提示して類似性判断を求め, 多次元尺度法による解析を行った。その結果, 図形の属性として集約性, 複雑性, 対称性の3次元が見出された。また, 同様の図形についてSD法による印象評定を求めたところ, 活動性, 力量性, 評価性の3因子が抽出された。大山・宮埜 [14] も, 図形生成アルゴリズムを用いて物理的特性を操作することで作成された16種類の図形について類似性判断を求め, 多次元尺度法による解析を行っており, その結果, 図形の属性として, 規則性, 複雑性, 曲線性の3つが見いだされたという。この研究に続き, 山口・王・椎名 [15] は曲線性, 複雑性, 規則性, 開閉性という4つの形態的特徴を軸とする32種類の図形を生成し, SD法による印象評定を求めた。その結果, 柔和性, 安定性, 活動性という3つの因子が抽出

され, さらに, 曲線性と柔和性, 規則性と安定性, 複雑性と活動性の間に密接な関係がみられたことを報告している。

これらの知見に基づき, 本研究で用いる額縁の形状を決定した。美術館やギャラリーにおいて, 私たちが最もよく目にする額縁の形状は四角形である。なぜ四角形の額縁が多用されるのだろうか。Oyama & Haga [12] によると, 四角形のように規則性, 対称性を備えた図形は評価性に対応し, 不規則性, 複雑性という逆の特徴を備えた図形では対応がみられなかったという。この結果より, 額縁の規則性, 複雑性を実験的に操作することで, 鑑賞者の印象は特に快さや好ましきといった評価の次元において変化すると予想される。よって本研究では正方形という規則的で対称的な図形と, 先行研究[12-15]を参考に, 直線を組み合わせる不規則性, 複雑性を強調した図形を作成し, 額縁として用いることとした。図形の形態的特徴には規則性, 複雑性の他に曲線性も挙げられている[14]が, 刺激の数を抑えるために曲線性の採用は見送り, 直線から構成される図形を選択した。

実験ではまず, これらの額縁と組み合わせる絵画について, それぞれの理解度に違いがみられるかどうかを確認した。さらに, 絵画の理解度が異なる場合に, 絵画と額縁の調和度および額縁の形状が印象に及ぼす効果に違いがみられるかどうかについて検討した。

2. 実験方法

2.1 参加者

総合大学に所属する学生76名(男性35名・女性41名, 平均年齢18.5歳, $SD=0.62$)。

2.2 刺激

絵画の選定のため, 予備調査として, 17～19世紀に制作された写実的絵画5点と20世紀以降に制作された現代絵画4点について, 本実験参加者とは異なる大学生17名に印象評定(7段階)を求めた。なお, これらの絵画は一般的に名の知れた画家の作品であったが, 印象が固定される可能性があるため, 誰もが知っているような有名な作品は避けた。印象評定には岡田・井上[3], 筒井・近江[4]において具象画に当てはまりやすい形容詞とされた“好ましい”, “美しい”, 抽象画に当てはまりやすいとされた“個性的な”, “おもしろい”の4つを用いた。その結果, “好ましい”, “美しい”の値が高かった絵画1(ヘーム《朝食図》1660年頃)と絵画2(カナレット《大運河とサルテ教会》1730年), “個性的な”, “おもしろい”の値が高かった絵画3(ハミルトン《Just What Is It That Makes Today's Homes So Different, So Appealing?》1956年), 絵画4(草間彌生《開花の季節に巡りあって》2009年)の4点が選ばれた(図1)。これらの絵画を, 形の影響を排除するため正方形(5.5×5.5cm)にトリミングした上で, 形状の異なる2種類の額縁(a, b)(図2)を組み合わせた。額縁aは絵画の形と同じ正方形であり, 額縁bは直線を組み合わせた不規則で複雑な形であった。

絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響

図1 実験に使用した絵画

図2 絵画に組み合わせた額縁

額縁の色は黒、線の太さは2mmであり、額縁のサイズは額縁aが10.0×10.0cm、額縁bが約11.5×11.5cmの範囲内であった。参加者にはこれら8個の刺激に加え、額縁をつけない絵画のみの刺激についても評価を求めた。

2.3 評価尺度

印象測定には10個の形容詞対（快い－不快な、良い－悪い、好きな－嫌いな、安心な－不安な、安定した－不安定な、派手な－地味な、騒がしい－静かな、嬉しい－悲しい、明るい－暗い、陽気な－陰気な）を使用した。これらは、これまでSD法を用いて行われてきた研究、特に芸術関連の研究において使用頻度が高かった形容詞[16]を参考に選ばれたもので、因子分析の結果、評価性（快い－不快な、良い－悪い、好きな－嫌いな、安心な－不安な、安定した－不安定な）・活動性（派手な－地味な、騒がしい－静かな、嬉しい－悲しい、明るい－暗い、陽気な－陰気な）という2つの因子が抽出されている[17]。尺度の内的整合性を示すCronbachの α 係数は評価性： $\alpha = .83$ 、活動性： $\alpha = .89$ であり十分な信頼性が確認されていることから印象評価尺度に採用した。さらに、額縁のない絵画のみの刺激に対しては理解度（理解できる－理解できない）、額縁をつけた刺激に対しては絵と額縁の調和度（絵と額縁が調和している－絵と額縁が調和していない）についても評価を求めた。評価スケールは対になる語句を左右に配置し、（左に配置された語句に）非常に当てはまるを1、かなり当てはまるを2、やや当てはまるを3、どちらでもないを4、（右に配置された語句に）やや当てはまるを5、かなり当てはまるを6、非常に当てはまるを7とする7段階評価であった。なお、語句はポジティブなものとネガティブなものが左右どちらかに偏らないように配置したが、結果の集計に当たってはポジティブなものに当てはまるほうが点数が高くなるように変換を行った。

2.4 手続き

授業時間の一部を利用し、評価用冊子を教室にて配布、その場で回収した。冊子は表紙とA4用紙上部にカラー刺激、その下に評価スケールを印刷した12枚の評価用紙から構成された。カウンターバランスをとるため、冊子は刺激の呈示順序が異なるものが2種類用意され、参加者には2種類のうちいずれか1つが配布された。回答にあたっては、額縁を含めた刺激全体をよく観察するよう指示を行った。回答は個人のペースで行われ、所要時間は15～20分程度であった。

3. 結果および考察

3.1 各絵画の理解度と額縁の調和度

4種類の絵画に対する理解度および絵画と額縁a・bと組み合わせた場合の調和度について、表1に示した。まず、理解度について、対応のある一要因の分散分析を行ったところ、絵画間に有意差が認められた（ $F(3,225) = 93.77, p < .01$ ）。多重比較の結果、絵画3と4を除く全てのペアにおいて有意差がみられた（すべて $p < .01$ ）。絵画2の理解度が最も高く、次に絵画1が3・4と比べて高かった。絵画1は静物画、2は風景画であるが、いずれも写実的な表現が用いられており、遠近法を用いた場面構成も明瞭であったため、描かれている内容が認識しやすく、理解度が高くなったと考えられる。一方、理解度が低かった絵画3と4は制作年代から現代絵画と呼ばれる。絵画3は写実的な人物画像やポスターを貼り合わせたコラージュ技法が用いられており各部分の認識は容易であるが、カラフルな室内に置かれたモノクロの人物画像やその不自然な姿勢から、作品の世界観が把握しにくかったと推測される。また、絵画4は部分的に人の顔や目らしきものは確認できるがその他の要素は抽象的であり、場面構成も不明瞭であることから、理解できないという評価がなされたものと考えられる。

次に、絵と額縁の調和度について、4種類の絵×2種類の額縁の二要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった（ $F(3,225) = 41.60, p < .01$ ）。下位検定の結果、額縁aの場合、絵画1と組み合わせたときの調和度が他の3つの絵画と比べ有意に高く、額縁bの場合、絵画3・4と組み合わせたときの調和度が絵画1・2と比べ有意に高かった（すべて $p < .01$ ）。また、額縁の形状による調和度の差異は絵画4を除く3つの絵画に見られ、いずれも額縁aを組み合わせたときのほうが調和度が高いという結果になった。特に絵画1と2では、額縁aとbの調和度の差がそれぞれ3.25、2.80と大きく、規則的、対称的な額縁aと比べ、不規則で複雑な

表1 理解度と絵と額縁の調和度 (SD)

	絵画 1	絵画 2	絵画 3	絵画 4
理解度	4.61 (1.41)	5.36 (1.36)	2.68 (1.33)	2.53 (1.43)
調和度 額縁a	5.39 (1.19)	4.68 (2.06)	4.62 (1.34)	4.66 (1.44)
額縁b	2.14 (1.17)	1.88 (1.25)	4.09 (1.86)	4.46 (1.86)

図3 絵の理解度と額縁の形状別調和度

額縁bを組み合わせた場合に調和度が大幅に低下することが明らかとなった。

さらに、理解度と調和度の関連をみるため、額縁の形状別に、横軸に理解度、縦軸に調和度をとったのが図3である。図から、額縁aの調和度は理解度にかかわらずほぼ一定(5.00前後)であるのに対し、額縁bの調和度は理解度が低い場合4.00程度であるが、理解度4(どちらでもない)を境に、理解度が上昇するにつれて低下しているのがわかる。以上の結果より、絵画3・4のように理解度の低い絵画の場合、額縁の形状による調和度の差異は小さく、どちらの額縁の場合もある程度の調和がみられたが、絵画1・2のように理解度の高い絵画の場合、不規則で複雑な形状の額縁bは調和しないと判断されたことが明らかとなった。

3.2 額縁の形状と印象評価

評価性・活動性因子を構成する各5項目の評定値の平均を算出し、各刺激の評価性および活動性得点とした(図4)。Cronbachの α 係数は評価性： $\alpha=.88$ 、活動性： $\alpha=.75$ と十分な高さであった。また、相関係数は $-.22$ であった。まず、額縁なしの場合の評価性・活動性と理解度との相関係数をみたところ、評価性と理解度の間に強い正の相関、活動性と理解度に弱い負の相関が認められた(表2)。また、額縁の形状別に調和度と評価性および活動性の相関係数をみたところ、額縁a・bともに、調和度と評価性に弱い正の相関が認められた(表2)。評価性は、主観的な好ましさを表す因子であり、理解度が高まるとそれに伴って好ましさが高まるという結果は、先行研究[4, 9, 10]と一致していた。さらに、調和度と評価性の間にも相関がみられたことから、絵と額縁が調和していると感じられると好ましさも高まることが確認された。

一方、理解度と活動性の間には負の相関がみられた。活動性は評価性との間にも負の相関がみられたことから、理解度

表2 理解度、調和度と評価性・活動性得点の相関係数

	評価性	活動性
理解度	.69 **	-.31 **
調和度 額縁a	.39 **	-.22 **
額縁b	.22 **	.47 **

** $p < .01$

図4 額縁の形状別評価性・活動性得点

の高低によって対応する印象評価が異なる可能性が示唆された。すなわち、理解度の高い絵画つまり写実的絵画は“快い”、“好きな”などの評価が高く、理解度の低い絵つまり現代絵画は“派手な”、“騒がしい”などの評価が高いという対応関係であり、抽象画と具象画の印象構造を比較した先行研究[3, 4]においても同様の結果が報告されている。

また、調和度と活動性の相関は額縁の形状により異なっていた。額縁aの場合、調和度と活動性には負の相関がみられ、調和度が高まるほど活動性は低くなることが明らかとなった。一方、額縁bの場合、調和度と活動性には、評価性との間の相関よりも強い正の相関がみられた。これより、額縁bの調和度は、活動性により強い影響力を持つことが示唆された。

次に、評価性・活動性得点について、それぞれ4種類の絵×額縁(額縁なし、額縁a、額縁b)の2要因分散分析を行ったところ、どちらも交互作用が有意であった(評価性： $F(6, 450) = 42.66$ 、活動性： $F(6, 450) = 12.33$ 、いずれも $p < .01$)。多重比較の結果、各絵画に共通して、評価性においては額縁なしおよび額縁aの値が高く、活動性においては額縁bの値が高かった。また、額縁なしの場合の評価性は

絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響

絵画2, 1, 3, 4の順に高く、活動性は絵画3と4が高かった。額縁aの場合、評価性が最も高かったのは絵画2であり、続いて絵画1が高かった。活動性は絵画4, 3, 2, 1の順に高かった。額縁bの場合、評価性には絵画間の差がみられず、活動性は絵画3と4が高かった。以上のことから、額縁aの形態的特徴である対称性・規則性が評価性と対応し、額縁bの不規則性・複雑性が活動性と対応していると考えられる。この結果は、形と印象の対応関係を明らかにした先行研究[12, 15]と一致しており、額縁として絵画と組み合わせただけの場合にも、形と印象の対応関係は安定的であることが示された。また、絵画間の比較から、絵画1と2は、額縁なしおよび額縁aを組み合わせた場合に評価性が高く、活動性および額縁bの場合の評価性は低いことが示された。絵画1と2はともに写実的絵画であり、理解度は高かった。先に述べた調和度と理解度の関係も考慮に入れると、理解度の高い絵画の場合、不規則で複雑な額縁を組み合わせることで調和度が低下し、それに伴い、快さ、好ましさなどからなる評価性も低下することが明らかとなった。一方、理解度が低かった絵画3と4は、額縁aを組み合わせた場合の評価性が最も高いという結果が得られたものの、額縁bの場合との差は絵画1・2に比べ小さく、ともに中程度の値であった。また、額縁aとbの調和度の差は小さく、いずれも中程度の値であったことから、絵画3・4のように理解度が低い絵画の場合、調和度や評価性は額縁の形状の違いによる影響をあまり受けないことが示された。しかし、活動性については額縁bの影響が強くみられ、額縁の形状が絵画全体の印象評価に及ぼす影響は、理解度によって異なることが明らかとなった。

4. 全体的考察

4.1 絵画の理解度

本研究の目的は、理解度の違いが、絵と額縁の調和度および印象評価にもたらす影響を検討することであった。まず、絵画の理解度について、写実的、具象的な絵は典型性が高く、そのため理解が容易であると予想された。実験の結果、遠近法を用い、静物や風景を写実的に表現した絵画は予想と一致して理解度が高かった。しかし、描かれた個々の事物は具象的であっても、不自然な要素を含んでいたり、作品全体の場面構成が不明瞭であったりする場合には理解度は低かった。このことから、絵画の理解度とは描かれた事物の具象性のみに規定されるのではなく、場面構成が明瞭であることが必要であると考えられる。つまり、絵の中に何が描かれているかという認識だけではなく、何を表現することを目的として作成されたかという、作品の世界観、作者の意図といったものが把握できるかどうか、理解度評価に影響を及ぼすと推察される。

また、表現方法の面から理解度について考えることもできるだろう。本研究の参加者は総合大学に入学したばかりの学生であり、先行研究[5, 6]における非専門家と同じく、写実性の高い刺激に対する選好を示した。日本の学校教育に

おいては、見えたとおりの写実的に描くという価値観が重視されてきたという[18]。このため、芸術に関する特別な専門教育を受けたことのない初心者は、写実的絵画こそが典型的な絵画であるという素朴概念のような知識構造を持つことが指摘されている[19]。したがって、既有知識に合致しない表現を用いた現代絵画は典型からの逸脱と判断され、理解できないと評定された可能性がある。典型性は絵画の理解を促進すると考えられるが、その効果は表現された内容を把握することだけではなく、対象を絵画作品として認識することにも関わっているのかもしれない。絵画の典型とは何かという議論も含め、理解度の規定因については、今後、多面的に考えていく必要がある。

4.2 調和度における理解度の影響

次に、理解度と調和度について、額縁の形状により関連性が異なっていた。規則的・対称的な形状の額縁aの場合、理解度の違いによる調和度の差異はほとんどみられず、やや高めの値を維持していた。これより、額縁aは絵画に対する理解の程度にかかわらず、一定の調和感が得られると考えられる。一方、不規則・複雑な形状の額縁bの場合、理解度が低い時には中程度の値であったが、理解度4（どちらでもない）以降、理解度が高くなるにつれて調和度が低下していた。

なぜ、理解度の高い絵画は額縁bと調和しないのだろうか。先に述べたように、理解度は評価性と正の相関関係にあることが示された。一方、額縁の形状と印象の対応関係をみたところ、額縁aは評価性と、額縁bは活動性と対応すること、そして、評価性と活動性は負の相関関係にあることが確認された。理解度が高く、評価性も高い絵画に、評価性とは逆の方向性を持つ活動性を強調するような額縁を組み合わせることは、鑑賞者に違和感をもたらし得る可能性がある。このように絵画から受ける印象と、額縁を組み合わせることによって強調される印象の齟齬が調和度の低下につながったと考えられる。

また、額縁の形状の影響は、形がもたらす印象効果だけでなく、絵画と額縁の形の一致不一致の問題と考えることもできる。本研究では、額縁以外の形の影響を排除するため、絵画の形を正方形に統一した。額縁aは絵画と一致した形であったが、額縁bは絵画とは全く一致しない形であった。Reberらの処理流暢性理論[8]によると、作品の典型性が処理の容易性につながり、ポジティブな美的評価をもたらし得るという。本研究に用いた4種類の絵画のうち、理解度が高かった絵画1と2はともに写実的で遠近法による空間描写がなされており、絵画としての典型性が高いと言える。このように典型性の高い絵画に対し、絵画の形状とは全く異なる不規則で複雑な形、つまり典型性の低い形状の額縁を組み合わせることは、額縁を含めた作品全体としての典型性の低下をもたらすだろう。このことが、調和度の低下、さらには評価性の低下につながったと考えることができる。

一方、理解度の低い絵画においては、額縁の形状の違いによる調和度の差が小さく、どちらの額縁であっても同程度の

調和が得られるという結果となった。この理由については2つの解釈ができる。1つは、理解度の低い絵画に対しては、額縁が絵画鑑賞にもたらす影響が小さいということである。しかし、額縁の形状による印象評価の違いが確認されたことから、この解釈が成り立つ可能性は低い。もう1つの解釈は、理解度の低い絵画はどのような形状の額縁とも調和しやすいということである。典型性の高い絵画と調和するのが典型的な額縁のみであったのとは対照的に、非典型的な絵画は、額縁の典型性も問わないのかもしれない。この解釈は、現時点では仮説の域を出ない。検証のためには新たな実験を行う必要があるだろう。

4.3 印象評価における理解度の影響

印象評価における理解度の影響について、理解度が高まると、快さ、好ましさを含む評価性も高まることが示された。これはReberらの処理流暢性理論[8]、およびその後の一連の研究[4, 9, 10]とも一致しており、刺激に対する理解の容易性が美的選好と関連するという説に新しい例を加える結果となった。一方、本研究で取り上げたもう1つの印象評価因子である活動性については、理解度との間に負の相関がみられ、理解度の高低によって対応する印象評価が異なる可能性が示唆された。形と印象の対応関係に関する研究において、形の不規則性、複雑性は、不安定さや躍動感と結びつきやすいと言われている[12]。先に述べたように、現代絵画の理解度が低く評定された理由を、典型から逸脱した表現の不規則性や複雑性と捉えるならば、これらの特徴が評価性を低くし、活動性を高めた可能性がある。ただし、活動性の増大には色彩の影響も考えられることから、理解度と印象の対応関係については慎重に検討していかなければならない。

4.4 まとめ

本研究では、額縁が持つ多様な要素のうち、形状に焦点を絞り、形状の異なる額縁と理解度の異なる絵画との組み合わせ効果について検討した。その結果、額縁の形状と絵画の理解度によって、絵画と額縁との調和度および作品全体に対する印象評価が異なることが明らかとなった。これより、絵画と額縁の組み合わせ効果を考える際に、理解度を絵画表現に対する主観的な評価の指標とすることの有効性が示された。鑑賞者は、絵画を取り囲む形、つまり額縁を含めた全体を見ており、絵画と額縁の調和度によって作品から受ける印象は変化すると考えられる。

実験では刺激として4点の絵画、2種類の額縁を用いた。SD法による印象測定を行う場合、実験参加者に評定を求める項目数が多くなることから、信頼性の高い結果を得るためには、一度の実験に多くの刺激を用いるのは難しい。したがって、人の美的処理についてより一般性の高い結果を導くためには、用いる刺激の幅を広げつつ研究を重ねることが必要であろう。同時に、限られた数の刺激であっても、その中に共通する法則を追究することもまた有効手段ではないかと考える。

最後に、本研究において使用した額縁は形態的特徴を強調するために作成されたものであり、実際に美術館やギャラリーにおいて使用されているものとは同一ではない。また、はじめに述べたように、額縁には形の他にも装飾、色、大きさなど様々な要素がある。これらさまざまな要素の影響を考慮に入れながら、実験によって得られた成果の現実場面への適用を試みることで、人がどのように絵画を認知しているか、実際の鑑賞場面に沿った解釈が可能になると考えられる。

参 考 文 献

- [1] Penny, N.: Pocket Guide: Frames, London; National Gallery Publications, 1997.
- [2] Leder, H., Belke, B., Oeberst, A., & Augustin, D.: A model of aesthetic appreciation and aesthetic judgments. *British Journal of Psychology*, 95, pp.489-508, 2004.
- [3] 岡田守弘, 井上 純: 絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学的分析, 横浜国立大学教育紀要, 31, pp.45-66, 1991.
- [4] 筒井亜湖, 近江源太郎: 視覚造形における理解度と美的評価, *デザイン学研究*, 57, pp.11-18, 2010.
- [5] Cupchik, G. C., & Gebotys, R. J.: The search for meaning in art: Interpretive styles and judgments of quality. *Visual Arts Research*, 14, pp.38-50, 1988.
- [6] Hekkert, P., & van Wieringen, P. C. W.: The impact of level of expertise on the evaluation of original and altered versions of post-impressionistic paintings. *Acta Psychologica*, 94, pp.117-131, 1996.
- [7] Schmidt, J. A., McLaughlin, J. P., & Leighton, P.: Novice strategies for understanding paintings. *Applied Cognitive Psychology*, 3, pp.65-72, 1989.
- [8] Reber, R., Schwarz, N., & Winkielman, P.: Processing fluency and aesthetic pleasure: Is beauty in the perceiver's processing experience? *Personality and Social Psychology Review*, 8, pp.364-382, 2004.
- [9] Kuchinke, L., Trapp, S., Jacobs, A. M., & Leder, H.: Pupillary responses in art appreciation: Effects of aesthetic emotions. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 3, pp.156-163, 2009.
- [10] Belke, B., Leder, H., Strobach, T., & Carbon, C. C.: Cognitive fluency: High-level processing dynamics in art appreciation. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 4, pp.214-222, 2010.
- [11] 金田晋: 額縁の構造, *美術*, 28, pp.1-12, 1978.
- [12] Oyama, T., & Haga, J.: Common factors between figural and phonetic symbolism. *Psychologia*, 6, pp.131-144, 1963.
- [13] Kikuchi, T.: A comparison of similarity space and semantic space of random shapes. *Japanese Psychological Research*, 13, pp.183-191, 1971.

絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響

- [14] 大山正, 宮埜寿夫: 形態知覚の属性—コンピュータ作成図形の類似性判断の多次元尺度法による解析, 日本心理学会第63回大会発表論文集, p.270, 1999.
- [15] 山口由衣, 王晋民, 椎名健: 図形の心理物理的特徴と意味的特徴の対応関係, 認知心理学研究, 1, pp.45-54, 2004.
- [16] 井上正明, 小林利宣: 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究, 33, pp.253-260, 1985.
- [17] 栗川直子: 額縁の形状と大きさが絵画の印象に及ぼす影響, 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 36, pp.251-263, 2013.
- [18] 辻泰秀: 写実的表現へのあこがれと美術教育の展開: 思春期における描画指導, 大阪教育大学紀要 第V部門, 41, pp.157-172, 1992.
- [19] 石橋健太郎, 岡田猛: 他者作品の模写による描画創造の促進, 認知科学, 17, pp.196-223, 2010.

栗川 直子 (学生会員)

2002年 岡山大学文学部行動科学科卒業。
神戸学院大学人文学部実習助手を経て、
現在、岡山大学大学院社会文化科学研究科博士
後期課程在学中。心理学の立場から、絵画
の認知プロセスの解明に関する研究を行っている。